

私の髪とたすけあいの輪

新潟大学教育学部附属新潟中学校

一年 榎田一穂

私は小学校の卒業式の終わった春休み、四年間伸ばし続けた髪の毛をばつさりと切りました。中学校へいくためのイメージチェンジではありません。ヘアドネーションをするためです。

ヘアドネーションとは、がんや先天性の脱毛によって髪の毛を抜けてしまった人に寄付された髪の毛でウィッグをつくる活動です。私も最初は知りませんでした。母が私にやってみたらどう、とすすめてくれたのでやってみることにしました。ヘアドネーションで寄付を募っている髪の毛の長さは六十センチと三十センチで、私は長く伸ばせる自信がなかったので三十センチで寄付をしようと決めました。

ヘアドネーションを決意した日から四年間私は髪を丁寧に洗ひ、かわかして、はやく髪が伸びるように結んだりして過ごしました。面倒臭がりだった私は、ついつい、風呂上がりに髪をかわかすのを忘れて嫌になって、とかさなかつたりする日もありました。でもその次の日には腰までのびた髪がからまつたり、もさ

もさしたりしてとても変な感触だったのを覚えています。なので寄付できる長さまでのびた時はとても嬉しかったです。やつと短くできる。と髪を切ってくれる美容院を探して予約すると、なんだか急に寂しくなりました。小学校三年生からずっと伸ばしていたので長い髪がもうすっかりなじんで、私の自慢になっていたのです。ですが寄付することを目標に伸ばし始めた髪だったので、誰かの役に立てるようにしたいという気持ちの方が心に強く残っていました。予約した日までは一週間程時間が空いていたので、私はその間、今までより丁寧に、しっかりと髪の毛の手入れをしました。

遂に予約した日がくると私はとても緊張してしまいました。美容室の方はヘアドネーションをしにきたというと、すごく喜んでくれました。どうぞ、と案内してもらった椅子に座り、鏡を見てみると髪を全部おろした私がつつていました。美容師さんは三十センチの髪の毛の束を何個も作り、「それでは切っていきますね。」

と言って私の髪にハサミを入れていきました。よかったら読んで待っていてくださいと渡された雑誌のことも忘れ、私は、鏡にうつる光景に見入っていました。右側の束が切られると、頭の右側が確かに軽くなっています。やがて全部の束がなくなると、頭もすっかり軽くなると、終わりましたよ、と切った束を美容師さん

が見せてくれました。台の上に行くつか髪の本が並んでいます。ついさっきまで私の髪だった八つの本は、なんだか見えていて不思議な気持ちになりました。

今、私の髪の毛が誰の元にあるかは分かりません。ですが誰かの助けになっていればとても幸いです。手を差しのべた方は分からなくても差しのべられた方は、それを受けとり次へつないで、「たすけあう」というのはそういうことなのではないか、と、私はヘッドネーションを通して思いました。募金やベルマークなども、したことはあるけど実感が湧かないことが多々あると思います。ですが確実に差しのべた手は誰かが握り返していて「たすけあいの輪」は少しずつですが広がっていくのだと思います。

すぐに動けるおもいやり

長岡市立青葉台小学校

三年 宮下音奏

よくびょういんにぼくはついていきます。お母さんのよく行くびょういんは車いすの人でも入れるように、だんさがありません。でも、くつばこにくつを入れてから入る人がほとんどいなくて、

くつがげんかんにズラリとならんでいます。きれいにそろえてあるくつでも、車イスの人が入ってきたら、そのくつは全部じやまになります。ぼくは、こんでいるまちあい室がいやで、げんかんにすわっていました。すると一人の車イスの女の人が入って来ました。車イスをおしてくれる人もいなくて、今から入ろうとする前には、たくさんのくつがじやまをして通れません。おばあさんは、くつを見てためいきをつきました。ぼくにでもくつがあつてこの先にすすめないことがわかりました。あとから来るだれかにくつをどかしてもらおうとしているようでした。ぼくは、何となく分かったのでおいてあつたくつを一足ずつりようわきにそろえて車イスが通れるようにしてあげました。こまっている人がい

るから何とかしなければいけないと思うよりも先に、自分が動いてくつをどかしていました。それに気づいたおばあさんが、「まあ、お兄ちゃん、ありがとね。ありがとね。」

と、ぼくをずつと見ておれいを言ってくれました。車イスで通れるギリギリにあけた道をゆつくり進みながら、おばあさんは何ども頭を下げてくれました。あとから家族の人が来て、ぼくの事を話して聞いたみたいで、ぼくにありがとうと言ってくれたあとに、お母さんがどこにいるのか聞いてお母さんの所へ行ってまたおれいを言っていたそうです。

ぼくは、いつも気がきくねと言われることはありません。でも、この車イスの人を見た時に、とっさに動いてくつがじやまになっているのがわかって、お母さんに言われてからじやなくても、どうかす行動に出っていました。

たすけあうことは、言われてからするものじやないんだと、ぼくは思いました。こまっている人がいたら、何も考えなくても、動いてしまうものなんだと思います。たすけたい気もちは、言われてするものじやないです。

お母さんが、

「たすけることは、心ですること。やさしい心でいたら、体がたすけようと、しぜんに動くんだよ。それが思いやりだよ。」

と、教えてくれました。ぼくは、やさしい心があるか分からないけれど、こまっっている人がいたら、いつでも、ささっと動ける人にもっとなりたいたいなと思いました。なんとなく動いた行動だけど、

「ありがとう。」

が、とつてもとつてもてれくさかったけれど、ぼくは、とつてもうれしかったです。

高れい者への思いやり

長岡市立川崎東小学校

六年 寺井 優

私の家には、私と八十才年のはなれた祖母がいます。私が小さかったころは、おままごとの相手をしてくれたり、折り紙やあやとりなど色々なことをして遊んでくれました。今は、私の方が身長が高くなり、何かをしてもらうことよりも、何かをしてあげることの方が増えてきました。

祖母はとても耳が遠いです。ほちよう器を付けていても話が伝わらないことが多く、特に低い声は聞こえにくいそうです。私の声は父や母より高く一番聞こえやすいので、よく父や母と祖母の間で通やくをしてあげます。祖母の耳元で話したり、見ぶり手ぶりを付けたら、口の動きが見えるように話したり、分かりやすいように工夫しています。たまに全然伝わらなくて、

「もおー、おばあちゃん、そうじゃないってば！」
と私がイライラすると、

「いいよ、いいよ。」

とあきらめる祖母の顔はちよつとさみしそうに見えます。なので、伝わりにくいことはなるべく紙に分かりやすく書くようにしています。また、電化製品のリモコンなど機械の使い方もよく分からないので、こわれていないのに

「エアコンがきかない。こわれて困った。」
と言ってきたりします。特に新しい物は使い方を覚えるのがめんどくさく苦手なようです。

最近、家で食洗器を買いました。祖母は使い方覚えられないようだったので、私は何度も何度も教えてあげました。でも私は言うだけでは忘れてしまうと思い、よく使うそう作ボタンにお手順番を紙に書いてはってあげました。目も悪くなっているので大きめにハッキリと書くようにしました。電源ボタンの①とスタートボタンの②、その二つをおすだけだと分かるとやる気になってくれました。今では朝ご飯の後のそう作は祖母がやってくれます。祖母のような高れい者といっしょに暮らすのは、大変なことも多いです。でも、ほんの少し手助けするだけで生活しやすくなることも多いです。手助けのやり方も相手の気持ちになって、分かりやすくすることや、簡単にすることの工夫が大切だと思います。それに、全ての事を手伝うと本人が何もできないままになってしまふので、まわりがやり過ぎるのも良くないのではないかと考えます。祖母も自分でできる事はできる限り自分でやりたいと思っ

ているので、例えば高い所の物を取るなど、一人でできないことや、間ちがったやり方をしている時に助けるだけでも助かることだと思います。

気づいて工夫したり考えて行動することは、私にとっても良い事だと思うので、これからも思いやりのある手助けをしていきたいです。

NHK新潟放送局長賞

あつ、この感じ

上越市立浦川原中学校

三年 山崎 早記

私には、ひいおばあちゃんがいました。ひいおばあちゃんは九十歳になっても、家の庭の草むしりをしたり、花壇をつくって花を育てたり、とても元気なおばあちゃんでした。週に二回、デイサービスにも通っていました。デイサービスの日の朝は、施設の人たちが来るのをいつも玄関に座って楽しみに待っていました。そして帰ってきた時は、いつも笑顔でした。それを見て私は、ひいおばあちゃんが幸せそうで良かったと思いました。

しかし、ひいおばあちゃんが九十四歳の時廊下ですべて転んでしまいました。そしてそれからはずっと、ベッドで寝たきりの生活になってしまいました。私にはひいおばあちゃんは元気が無くなっていった気がしました。トイレに一人で行けなくなりました。台所でみんなのご飯を食べられなくなりました。とても悲しい思いをしていたのではないのでしょうか。

ひいおばあちゃんが悲しい思いをしていると分かったのは、おばあちゃんが亡くなった後でした。ベッド上での生活は一人ぼっちで、

ご飯の時やおむつ交換の時にしか交流できません。だから、ひいおばあちゃんはいつも、

「おーい、誰かー。」

と叫ぶのです。さらに、ベッドの柵や障子をガタガタと揺らします。呼ばれていくと、

「水を持ってきてくれ。」

「起こしてくれ。」

など、頼み事。だから、面倒くさくて、足が部屋に向きませんでした。

ある日、おばあちゃんは

「台所で、ご飯を食べたいなあ。」

と言いました。「大丈夫かな。」と思いながらも、車イスのまま、おばあちゃんはご飯を食べました。

この時です。この感じ。「あつ、この感じ。何だかななつかしいなあ。」と私は思いました。でも、ひいおばあちゃんが台所でみんなと一緒に食べたのは、これが最後でした。

九十六歳のある日、おばあちゃんが亡くなる前日でした。私は今でもこの日は奇跡の一日だと思っています。お昼ご飯は、いつもお母さんやおばあちゃんがめんどうを見ていたけれど、この日は、私やお姉ちゃんたちで、一口ずつ食べさせてあげました。さらに、午後には近所のおばあちゃんたちが様子を見に来てくれました。なぜ

か、この日は、みんなひいおばあちゃんに会いに来たのです。その夜、おむつ交換には、お母さんと私が行きました。最後に、「おやすみ。」と言おうと思ったけど、「また、明日、言えばいいか。」と思い、そのまま部屋を出ました。次の朝です。ひいおばあちゃんが亡くなったのは。涙が出ました。昨日、言えなかったおやすみの一言。二度と言えません。とても後悔しています。

ひいおばあちゃんが亡くなった後、私のひいおばあちゃんへの対応を振り返ってみました。「おーい。誰かー。」こう呼ぶとき、ひいおばあちゃんはどんな気持ちだったのだろうか。

そして、思い出したのが最後の夕ご飯。

「あつ、この感じ。」と私を感じたのは、四世代家族全員で食卓を囲む中から生まれた思いだった。喜びを分かち合い、困難は皆で助け合って乗り越える。

共生、「助けあう社会を。」と叫ばれます。しかし、それを支えるのは「家族」という一番小さな社会。皆で助け合い生きるための決意を、私はひいおばあちゃんから貰いました。

相手の立場で

新潟市立関屋小学校

六年 伊藤結風

私の祖母は、私が生まれる前、脳にしゅようができて、大きな手術をしました。手術をしなければ半年で死ぬと言われ、手術を受けようと決めたそうです。

命と引きかえに、失ったものが多くあります。まぶたが閉じなくなり、目が乾いて視力が低下しました。耳が聞こえにくくなり、話しかけられても、気付けないことが多くあります。バランスが取れないため、自転車に乗れなくなりました。車の運転もできません。

手術で見た目が変わってから、祖母は「こわい。」「気持ちが悪い。」と、知らない人に言われることがあります。心ない言葉に、傷つかない人はいません。人を悲しませる言葉は、傷付けられた人の心に残り、積もっていきます。言ってしまったことに気付いて相手にどれだけ謝っても、消えることはありません。

祖母は病気になって苦しみました。祖母の気持ちを知らない人に、そんな風に言われたくありません。病気を抱える人に会った時、自分もこうなるかもしれないと考えて、優しく接することはできないのでしょうか。

病気で見た目が変わっただけで、ちがった目で見られるのはおかしいし、あつてはなりません。祖母には、みんなと同じように、生活する権利はないのでしょうか。

私は、家族のために行動し応えんできる、やさしい祖母が大好きです。いつも私の一番の味方でいてくれます。生きていてくれて、とてもうれしいです。

もし私が「こわい。」「気持ちが悪い。」と言われたら、外に出て人と話したり、出かけたりする権利はないのかと、苦しくなります。またそんなことを言われるんじゃないかと考え、こわくて外に出なくなると思います。

でも祖母は、私と一緒にラジオ体操に行ってくれたり、私が出場した水泳大会の応援に来てくれたりしました。自分のしたいことをあきらめず、後かいいないように強く生きている祖母は、とても勇気がある人です。

私は、これからも祖母と一緒にいたいと思います。祖母ができないことは、手伝って一緒にやります。地域の方にあいさつされて気付かない時は、私がまず挨拶を返して、祖母に呼びかけます。

荷物があれば、持つのを手伝ったり、通りやすいように、ドアを開けます。

相手の立場に立って考えようとしなければ、病気を抱える人の苦しさをすることはできません。だからこそ、その人の側にいて一緒に生活して欲しいと思います。苦手なことがあるからと、見た目が人と違うからと、自分達の輪に入れず、一人にしないで欲しいです。

仲間外れや差別がある世の中で、幸せが続くはずはありません。誰かが辛い思いをする世ではなく、みんなが幸せに思える世の中を作りたいです。

差別のない社会へ

長岡市立東中学校

二年 田代 愛咲美

私は先天性の難聴です。私は難聴の中では軽い方ですが、小さな声や音などが聴こえづらいので補聴器を使っています。補聴器は自分の耳と同じ形の小さな機械ですが、聴こえづらい音を拾ってくれる役割をしています。簡単に言うと、「私の耳」です。

私は今年のクラス替えが、とても心配でした。去年は、私が補聴器を使っていることに対して、すぐに受け入れてもらえたので、一年楽しく過ごせました。ですが、新しいクラスになった時に、

「あの子、耳に何か付けてるね。」

「耳が聴こえないんだって。」

などと言われ、笑われたりしないか、春休みの間はとても心配でした。

そして、不安ながらもクラス替えが終わりました。でも、私が補聴器を使っていることを知っている人が少なかったので、ますます不安な気持ちになりました。

そんな中、二年生に進級し、新しいクラスでの生活が始まりました。始めの頃は、なかなかクラスになじめず、同じクラスだった友達と行動していました。補聴器のことを心配しながら、一カ月が過ぎました。

ある日、私は補聴器を落としてしまいました。私は、クラスメイトに何か言われると思ったので、急いで拾おうとしました。でも、Mちゃんは

「大丈夫？壊れてない？」

と優しく声をかけて、拾ってくれました。その時にMちゃん以外のクラスメイトも、心配して声をかけてくれました。私はとても嬉しくて温かい気持ちになりました。

その日をきっかけに、Mちゃんと仲良くなりました。Mちゃんは補聴器のことをすぐに受け入れてくれ、私を助けてくれるようになりました。例えば、授業中に聞き逃がしたことがあったら、親切に教えてくれます。またMちゃんのおかげで、沢山の友達と仲良くな

れたし、補聴器のことも受け入れてもらえるようになりました。今では、Mちゃん以外の友達も、私が困っていたら当たり前のように助けてくれます。私を助けてくれる友達に、とても感謝しているし、毎日が楽しく生活できていることは、みんなのおかげだと思っています。ます。

でも、中には理解してもらえずに、悩んでいる人がいるのが、現状です。先日、テレビで悲しいニュースを見ました。目が不自由な方が点字ブロックの上を歩いていたら、歩きスマホをした男性に追突されて、転んでしまいました。その時に、男性は

「目が見えないのに、一人で歩くな。危ないだろう。」

と言って、目の不自由な方の足を蹴ったそうです。私は、そのニュースを見て、とても心が傷みました。点字ブロックは誰のためにあるのでしょうか。その男性は分かっていたのでしょうか。私は男性に、自分の行動を振り返ってほしいです。

みなさんは体の不自由な人を見た時に、変な目で見たり、笑ったりしていませんか。また、困った人を見ても気がつかないふりをしていますか。もう一度、今までの自分を振り返り、考えてみてください。自分にできることを探して、動いてみて下さい。この行動が

増え、身体の不自由な人達と助け合える社会になるきっかけになることを願います。